不滅のアーン・マレー（ERN MALLEY）

――オーストラリアの代表的詩人――

N・A・ワデル

序

最近までオーストラリア文学は、オーストラリア本国以外ではあまり読まれることがなかった。英国や米国、又他の英米文学が勉強されている国々で取り上げられることも少ないのが現在までの状況である。私はオーストラリアの有名な詩人 A. D. Hope の詩集を読みたいと思ったが、どこを捜しても手に入らなかったので、諦めざるを得なかった。

近年オーストラリアの小説家パトリック・ホワイト（Patrick White）が国際的に認められて一九七三年にノーベル文学賞を受けた。又、オーストラリア詩人のピーター・ポーター（Peter Porter）、クライブ・ジェイムス（Clive James）は有名であり、現在英国で活躍している。しかし大体に於て、オーストラリア文学の読者はオーストラリアだけに限られ、国際的なものにはまだ至っていない。

そのような中で、これから紹介するアーン・マレーはほとんど名前も知られていないが、オーストラリアの中では非常に有名な詩人と言われている。文学にかなり通じている外国人達の間でもアーン・マレーという名は全然覚えがないであろう。しかし、国内に於ては彼と彼の作品が生んだ評論、文学、音楽、映画等の数々を考えると、その影響力は大きいと言わなければならない。彼が亡くなってから、ほとんど三十年間、彼の特異な作品は出版され続けている。

オーストラリアの引用文辞典には、彼の詩からの引用が目立って多いという事から言っても、アーン・マレーはオーストラリアの最も注目されている詩人の一人（最大の詩人と言われることもあった。）と考えられるのは当然のように思われる。又最近彼に関する文献はますます増え続ける傾向にあり、芝居、オペラ、テレビシリーズ、小説等、次々に出てきている。

アーン・マレーが文学界に注目された事件は、オーストラリアに於ける中心的且つ重要な文学イベントの一つだと言われたことさえある。実は私の長年の友人であるハロルド・スチュアート氏[1]が、そのいわゆるアーン・マレー事件と深く関わっていた一人であったと以前からわかっていたが、数年前にその事件の実体について詳しく聞いてから、その事件が興味深いものであることを知って、以来、文献を読んで友人に問う興味がますます深まった。私はこれからアーン・マレーの物語と彼の作品の一風変った成功について述べてゆきたいと思う。その事件自体もユニークだが、現代のヨーロッパやアメリカ文学の意義と現代的発展の傾向をみると、面白くも共通する所がある。特に現代的な詩論が二十世紀の西洋文学を支配してきたことを考えると興味深いのである。

一　アーン・マレー事件

一九四〇年代のオーストラリア芸術は伝統的な芸術家に支配されていた。しかし、ヨーロッパ、アメリカの前衛芸術運動の侵入はこの頃から始まる。[2]一九四四年の春、アングリ・ペンギンズ（Angry Penguins）というオーストラリアの前衛文芸雑誌が創刊されて間もなく、その中心人物で前衛作家であり、又編集委員の一人でもあったマックス・ハリス（Max Harris）[3]のもとに一通の手紙が届いた。それはエセル・マリー（Ethel Malley）という女性からのもので、中に数編の詩が添えられていた。説明によると、その詩は彼女の兄弟アーン・マレーが書いたものという事であった。

Max Harris

アーンは最近他界し、その詩は彼の私物の中から見つけ出されたが、エセル自身あまり文学的なことがわからない為に、もしかすれば文学的価値があるかもしれないと思い送ってきたのであった。その詩を読んだマックス・ハリスは非常に感銘を受けた。すぐに彼女に手紙を送り、他の詩をもっと送ってほしい事、そしてアーン・マレーについてもっと知りたい事を伝えた。エセル・マレーはそれに対し“The Darkening Ecliptic”という題の詩集と数枚に亘る長い返事を出し両者の間には手紙のやり取りがあった。そしてその中の二通だけが後に公開された。④

彼女の手紙によれば、アーン・マレーは一九一八年英国のリバプールに生まれ、家族と共にオーストラリアに渡った。十五歳で学校をやめ自動車修理工になったが、その後転転と仕事を変った。その後グレーブズ病⑤という非常に珍しい病気に罹り、長い闘病生活の後亡なったということであった。

アーン・マレーの詩に対するハリスの評価は非常に高かった。彼女への手紙に凄い才能の持ち主“a poet of tremendous power”であると書いている。ハリスは他の編集委員と相談してアーンの十六集の詩全部をアングリ・ペンギンズの次号に掲載することを決定し、彼自ら長い賞讃の序文を書いた。

雑誌の評判は頗る良かった。永年オーストラリアが待ち望んでいた大詩人が遂に現われたという意見まで出る程であった。

ところが、この詩集は人を担ぐ為に編み出されたものだということに気付く人は殆どいなかった。つまりこれは所謂 literary hoax であった。英国には昔からオシアン(Ossian)・チャタートン(Chatterton)というような有名なホークスがあったが、これはまさにそのようなものであった。しかし、前者のホークスと異なり、アーン・マレーのホークスはパロディが目的であった。アーン・マレーという人物は架空の人物で、ジェームズ・マコーリー(James

James McAuley

McAuley）⑥とハロルド・スチュアート（Harold Stewart）という若い詩人二人で、その詩人と作品をつくりあげたのである。当時オーストラリアにもてはやされつつあった現代（モダニズム）主義文芸運動に属している詩人達の運動の真相をパロディによって世間に知らしめたかったのである。しかしホークスの事実が遂に新聞社に洩らされた。当時の新聞界はかなり保守的であったので、前衛の人達を物笑いにするこの機会に飛びついて、その事件を多いに取りあげた。それによって、アーン・マレー事件は予想以上に大きく拡大していった。そこで二人は自分達の立場を説明する必要が出てきて、シドニーの新聞社に手紙を送り自分達のホークスを認めた。

Harold Stewart

二　アーン・マレー神話誕生

ホークスをやってのけた人達の立場を語る為に、新聞社への彼らの手紙を中心にして、その手紙の内容を私が少し補ない乍ら、これから触れてみたいと思う。

スチュアートとマコーリーは自分達の知り合いの女性の駆け出し記者に、その詩がいかさまであることを教えた。時期がくれば彼女のスクープにして彼女の手柄にしてやることができればと考えてのことであった。興味深いことに、次の段階で二人は『前衛の絵画』も騙すつもりであった。スチュアートは *National Geographic* という雑誌の写真から鋏で色々な絵を切り抜いて、これも馬鹿馬鹿しいようなコラージュをつくった。⑦それをアーン・マレーの描いた絵としてアングリ・ペンギンズに送るつもりであった。しかし、その矢先に、その女性記者が自分の編集長にその秘密について口を滑らしてしまったのである。真実を知った彼はすぐに自分のスクープとして大衆紙“Sydney Sun”に発表してしまった。そのためにアングリ・ペンギンズに詩が掲載された数週間後の一九四四年の六月五日には、ホークスは知れ渡り、オーストラリア全土にセンセーションを巻き起こした。しかし、オーストラリアだけにとどまらず、

ロンドンタイムスを初めとするヨーロッパの新聞やニューヨークの新聞までが喜こんで記事にした。

彼らが架空の人物アーン・マレーをつくり出した理由や目的として、彼らはこのことを個人的な恨みや悪気があってしたことではなく、むしろ「真剣で文学的な実験を行なうためにしたことである」と新聞への手紙の中で述べている。彼らの知りたかったことは「このような作品をつくる者と賞讃する者が本当の前衛作品と、意識的にわざとつくりあげられたナンセンスとを区別することができるかどうか」という点であった。マコーリーとスチュアート自身の詩は伝統的なスタイルで書いたものであり、彼らは詩における意味と技法を無視する当時の傾向に対し嫌悪感を抱いてみていた。彼らはその傾向の元兇である英国は、ともかくとして、その流行がオーストラリアまで及び始めて根をおろしつつあると考えていた。しかもそのオーストラリアであらわれた芸術が産んだ作品は、特に目に余る程滑稽で、欧米に於けるダダとシュールリアリズム等の運動はさておき、若いオーストラリア人達がかいていた前衛詩は、実は馬鹿げた文学を信奉する者達が自分達の世界の中だけで互いに誉め合ってそれらを great poetry として見做しつつあったのである。文学的なよしあしに対する識別力が働かなくなっているのだ。意味と構造も全くなく〃「恰も誰かが派手なペンキを塗って、それが家だと言い張るようなものだ。」〃

そこで彼らは実験をしようと決意した。しかし彼らがその作品の本質まで見抜く事が出来ない可能性もあったので、マコーリーとスチュアート自身だけの考えでないことを証明するために、その実験によって決めようとした。例えばハリスがもしホークスを見抜く事ができたら二人の負けで、形勢は一変していたであろう。

彼らはアーン・マレー⑧の生涯の全作品をわずか半日でつくりあげた。しかし彼らの友達がそのような短時間では不

Angry Penguins

1944 Autumn Number
to Commemorate
the
Australian
Poet
Ern Malley

可能であると反論したので、同じ時間内で、同じ数の創作を試みることを勧めた。その結果、その出来具合はどちらかというとアーン・マレーの詩よりも面白いパロディが出来上ったという。

彼らの参考書としては、たまたまデスクにあった本しか使わなかった。例えばコンサイス・オックスフォード辞典、シェークスピアの作品集、引用文の辞典等⑨をランダムに開けて言葉か句を拾った。そういうものをリストアップしてそこから無意味な文章をつくり、たまには間違った引用をして、出来るだけひどい詩をつくり出し、それに音韻辞典から特にひどい韻を選んだ。例えばレーニンからの引用文があって、それは〝感情は熟練労働者ではない〟（"The emotions are not skilled workers"）というものだ。又「陳列品としての文化」（Culture as Exhibit）という詩の初めの三行は、米国内務省発行の蚊を撲滅する為の配水方法のリポートからそのまま取られたものであった。

Swamps, marshes, borrow-pits and other
Areas of stagnant water serve
As breeding grounds.... Now
Have I found you, my Anopheles!〔＝マラリヤ蚊〕

彼らの詩作方法は極めて簡単であった。手紙の中にあった三つの条件を取りあげると、

一、理解出来るような意図があってはならない。
二、テクニックは無視する。わざとひどいお粗末なテクニックを強調する。
三、スタイルとしては、マックス・ハリスの作品のみ真似るのでなく、彼を代表とする全体の文学的流行を真似る。

そうして彼らは最後に出来るだけ誇張した、無意味な文章で序文を書き上げ完成させた。そのようにして作られたものであるので、アーン・マレーの作品は文学的価値は全くないものである。

しかし、そのような極めていい加減な作品であるにもかかわらず、前衛の人達の間では可成りの文学的価値をもつものとして主張されようとしていた。その人達が無能であると証明しているのでもなく、むしろもっと面白いことを証明している。それは〝裸の王様〟の話のように文学流行が催眠術的力を持つようになり、大勢の人間の識別力の働きを麻痺させる力を持つことができるということである。

フランスで始まったダダ運動から超現実主義(surrealism)が生まれ、それからイギリスにヘンリー・ツゥリース(Henry Treece)の提唱した新黙示録運動(New Apocalypse)

が生まれたが、[10] マコーリーとスチュアートは、それらの運動はさておき、差し当りの目的は目前にあると考えた。つまり、その流れを受け継いでいるオーストラリアのグループのアングリ・ペンギンズの文学の正体を暴露しようとしたことを、ここで見失なってはいけないと思われる。以上はマコーリーとスチュアートが新聞社へ宛てた手紙の主な内容である。

三　アングリ・ペンギンズ

前に述べたように、第二次大戦以前のオーストラリア文学は少数の非常に堅い、伝統的な文学者に支配されていた。概してその文学への考えを英国から受け継いだ人達である。しかし若い詩人達のグループは既成の価値観に失望し、それらが世界を無意味な第一次世界大戦へと導いたと信じて受け入れる気持にはなれなかった。彼らは当時の詩人や芸術家が信じていた理想と規則を否定したかった。そういう中でヨーロッパの文学への憧れは、彼らの文学への出発点となっていた。その中で特にイギリスの詩人ハーバート・リード（Herbert Read）の芸術論がある。リードは英国で一九三〇年代と四〇年代に起ったアナキスト・インテレクチュアル運動の提唱者の一人であり、彼の〝ポエトリーエンド　アナーキー〟（*Poetry and Anarchy*）が一九三八年に出版され、多大の影響を与えた。しかし英国の前衛の流れが、遠いオーストラリアまで届くには時間がかかった。オーストラリアに於ては、少数の若い芸術家や作家がシュールリアリズム、前衛芸術を紹介する為に運動が起り、前衛芸術雑誌アングリ・ペンギンズを一九四〇年代の初めに創った。その目的は現代主義の実験的な詩を書く人達に発表の場を与えることで、その場所はシドニーやメルボルンから離れている地方都市のアドレード（Adelaide）であった。

モダニストの運動の思想的基盤は、ハーバート・リードの思想に強く依存していた。特に彼の〝芸術と社会〟（*Art and Society*）の及ぼした影響は大きかった。その中でリードは芸術家と芸術家の自由、社会とのつながり等を精神的、文化的、社会的に論じている。リードは当時の芸術に息吹きが感じられないとして、そういう枠組から抜け出すために、人間の個人の無意識より湧き出る重要性を讃えた。

そういう理論がアングリ・ペンギンズの思想的基礎になった。アーン・マレーはモダニストの識別力の無さと詩的技巧力の無さを暴露するつもりでつくられたものである。そして、その目的は一応果たされたが、ここで又面白い展開がみられることになった。つまり、その後、マックス・

ハリス達がマコーリーとスチュアートのアーン・マレー詩集を、詩的な天来の賜物である作品としてみるようになったことである。アーン・マレー詩集を分析し、その中に精気に満ちた思想的にも、詩的にも素晴しいものを指摘し、英国からは有力な支持を受けた。リードはハリスへの手紙に[11]、もし彼の立場にあれば自分も詩集の中の数篇に騙されたであろうと認めた。彼の言葉はそれからしばしば引用され、そのモダニストの人達の基本的な主張を裏付けるために用いられた。

「もし感受性のある人間が想像的作品を模造しようとすると、人を納得させるようなものをつくるためには自分の詩的能力を使わざるを得ない。もしそれを効果的に使えば結局自分を騙せることになる。アーン・マレーをつくった人達はそういうことだったといえる。」

事件が表に出てから数ヶ月後、オーストラリア南部の小さな地方都市アドレードで、州立警察がアーン・マレーの詩を猥褻としてハリスを告訴した。それは話題になるような長い裁判となったが、マコーリーとスチュアートはハリスを助けるために、その告訴への抗議文を新聞に出した。当時のオーストラリア社会、特に地方社会が非常に保守的であったことから、結局ハリスが有罪になり、五ポンドの罰金を払わされた。滑稽なのは、その裁判での論点はアーン・マレーの詩自体が意味のわからないナンセンスなものであるにもかかわらず、非道徳的であるとか、猥褻であるというふうに、警察側が決めつけ主張していることである。[12]しかし、二人の本来の目的はその裁判によって全く見失われてしまった。そしてそれから戦後までの数年間は、アーン・マレー事件の波紋はほとんど消え去ったかにみえた。

戦後になると、ハリスはアーン・マレーの詩の文学的価値を又強調し始め、その詩集を再版することにした。つまりマコーリーとスチュアートは、自分達の意図にかかわらず、結局深遠な詩をかいてしまった、ということを強調したのである。それは現在まで十二回以上も版を重ねられている。事件当時、これは一つの文学的出来事で終わるであろうと、関係していた人達でさえ思っていたのに違いないが、アーン・マレーの伝説が思いがけずオーストラリア文学や文化精神に非常に深く根づくことになったのである。アーン・マレーはモダニスト対伝統主義の論争に発展して注目された。現代主義（モダニズム）の主張を守るために一般芸術家や評論家が伝統主義の主張に対して共同戦線をはるに到った。戦後文化の左翼化への動きに乗って、モダニストの立場は断然有利になった。アーン・マレーの詩は国の代表的な詩

人の作品として高校のテキストにまで入れられた。やがて元の伝統主義者の声はほとんど聞かれなくなった。

時とともに評論家や学者がジャーナリストに変ってこの問題に取り組み、その後歴史的な冷眼でみられたアーン・マレーの詩の真価を問われることになった。フォーカスが自然にアーン・マレー事件そのものから詩的インスピレーションの根源への探究に移った。

極く最近になり、又英米に倣ってオーストラリアの芸術界に伝統的な構造を見直す芽生えが微かであるがでてきた。若い学者がアーン・マレー事件のルーツまで溯って両者の立場をもう一度考え、その事件の再評価をしようとする動きもあることをみると、この論争は時代の変化に応じてまだまだ続いてゆきそうである。オーストラリア芸術やオーストラリア文化一般にますます深く浸透してゆく兆候がみえる。

私は今回の執筆に当り *Ern Malley*,（Allen & Unwin Australia, Sydney 1988）に負うところが多かった。これはどちらかというと、前衛側の主張を説明する本である。今まで出版されたもののほとんどは、前衛の立場を描く意図がどこかに見い出されるが、その事件の全相を明らかにする本は未だ見当らず、その出現を期待したい。

註

① ハロルド・スチュアート（一九一五～）一九六六年来日以来、京都に住む。俳句の翻訳や、詩作活動を続ける。代表的著作 *By the Old Walls of Kyoto*, Weatherhill, Tokyo（1981）は、彼の自伝的ストーリーを長編詩に託している。

② アングリ・ペンギンズは、マックス・ハリスとカー（D. B. Kerr）によって一九四〇年に創刊され、一九四六年に廃刊となる。

③ マックス・ハリス（一九二一～　）作家であるが、後に本屋、ビジネスマンとなる。一九四〇年の創刊から四六年の廃刊までアングリ・ペンギンズの編集に携わった。戦後一九五二年、友人と共に「アーン・マレーの日記」（*Ern Malley's Journal*）を創刊するが、一年で廃刊となる。

④ 全部で十通程書かれている。最近まではマックス・ハリスが公表した二・三通の手紙しか知られていなかったが、残りの未発表の手紙も最近発見された。現在、オーストラリアの大学教授である文学者がアーン・マレーの物語を執筆中であるが、その未発表の手紙も、その本の中で発表される予定である。

⑤ グレーブズ病（Grave's Disease）は甲状腺の病気。

⑥ ジェームズ・マコーリー（　―一九七六）代表的なオーストラリアの詩人、エッセイもある。マコーリーは晩年、信仰厚いカトリック信者になり、それは彼自身の文学にも現われていた。

The End of Modernity: Essays in Literature, Art and Culture, Angus & Robertson, Sydney, 1959.

⑦ このスチュアートの作ったコラージュ、十二枚のうちの十一枚が、一九八九年、シドニーで発見された。注④に述べた本に全部載せられる予定である。

⑧ アーン・マレーの名前の由来。
アーンはオーストラリアの英国支配に対する初めての抵抗運動の主人公の名前である。マリーはオーストラリア特有の砂漠の小さなブッシューの名前である。

⑨ Murray-Smith, *The Dictionary of Australian Quotations*, Heinemann, Melbourne 1977.

⑩ ダダは結局文学を否定するものであり、全ての価値観を壊す。〃世間のまなこに唾をかけた〃と表現されたように、当時の芸術、文学、道徳の一般社会に対する猛烈な抗議であった。デビッド・ガスコン（David Gascoyne）の〃超リアリズムの短い歴史〃（*Short History of Surrealism*）（一九三五年刊）から引用すると「当時、知性のある人達の多くは、生きている問題の最期の一つの解決方法は自殺しかないと考えていた。ダダは自殺の狡猾な一種で、ほとんど狂的な絶望の現れであった。」
　ダダの革命的なアナキズムは割にはやく厭きられることになる。一九二〇年代のシュールリアリスト革命が起った時、ダダイストはほとんどシュールリアリストになった。ダダイストは単なるアナキスト的な否定をやめ、シュールリアリストのより肯定的な立場をとっていった。シュールリアリズムは人間の想像力を規制的束縛から解放し、精神的な無意識行為の到来を導き出す。ダダと比較するとシュールリアリズムには使命というものがあり、現在の価値観を壊しては取りあえず新しい価値観をつくり、自己のリアリティを考え直すショックを与えるために、その作業を繰り返してゆくのである。

⑪ ハーバート・リードの手紙の結末は、次のようなものであった。

It comes to this: if a man of sensibility, in a mood of despair or hatred, or even from a perverted sense of humour, sets out to fake works of imagination, then if he is to be convincing he must use the poetic faculties. If he uses these faculties to good effect, he ends by deceiving himself. So the faker of Ern Malley. He calls himself 'the black swan of trespass on alien waters,' and that is a fine poetic phrase. So is 'hawk at the wraith of remembered emotions' and many other tropes and images in these poems. Others are merely sophisticated or silly:

The elephant motifs contorted on admonitory walls,
Move in a calm immortal frieze
On the mausoleum of my incestuous
And self-fructifying death.

I have mistrusted your apodictic strength, etc.

This kind of rhetoric is modern Ossian, but, like Ossian, can understandably deceive the best of critics. So much for Ern Malley.

⑫ 警察が猥褻、下道徳として指摘した詩の一つは、次のNight Piece である。

The swung torch scatters seeds
In the umbelliferous dark
And a frog makes gutteral comment
On the naked and trespassing
Nymph of the lake.

The symbols were evident,
Though on park gates
The iron birds looked disapproval
With rusty invidious beaks.

Among the water lilies
A splash—white foam in the dark!
And you lay sobbing then
Upon my trembling intuitive arm.

附録

(1) Swamps, marshes, borrow-pits and other
Areas of stagnant water serve
As breeding-grounds.... Now
Have I found you, my Anopheles!
(There is a meaning for the circumspect)
Come, we will dance sedate quadrilles,
A pallid polka or a yelping shimmy
Over these sunken sodden breeding-grounds!
We will be wraiths and wreaths of tissue-paper
To clog the Town Council in their plans.
Culture forsooth! Albert, get my gun.

I have been noted in the reading-rooms
As a borer of calf-bound volumes
Full of scandals at the Court. (Milord
Had his hand upon that snowy globe
Milady Lucy's sinister breast...) Attendants
Have peered me over while I chewed
Back-numbers of Florentine gazettes
(Knowst not, my Lucia, that he
Who has caparisoned a nun dies
With his twankydillo at the ready? ...)
But in all of this I got no culture till
I read a little pamphlet on my thighs
Entitled: "Friction as a Social Process."

What?
Look, my Anopheles,
See how the floor of Heav'n is thick
Inlaid with patines of etcetera...
Sting them, sting them, my Anopheles.

(2) Coda
We have lived as ectoplasm
The hand that would clutch
Our substance finds that his rude touch
Runs through him a frightful spasm
And hurls him back against the opposite wall.
(Culture as Exhibit)

(3) Princess, you lived in Princess St.,
Where the urchins pick their nose in the sun
With the left hand. You thought
That paying the price would give you admission
To the sad autumn of my Valhalla.
But I, too, invented faithfulness.

(Perspective Lovesong)

(4) That rabbit's foot I carried in my left pocket
Has worn a haemorrhage in the lining
The bunch of keys I carry with it
Jingles like fate in my omphagic ear
And when I stepped clear of the solid basalt
The introverted obelisk of night
I seized upon this Traumdeutung as a sword
To hew a passage to my love.

(Sybilline)

(5) In the twenty-fifth year of my age
I find myself to be a dromedary
That has run short of water between
One oasis and the next mirage
And having despaired of ever
Making my obsessions intelligible
I am content at last to be
The sole clerk of my metamorphoses.
Begin here:

(Petit Testament)

(本学助教授　英文学)